技術・経営研究会
久保田要氏勉強会
「風景づくり」
学生感想文集

1989.7.10

東京電機大学建築学科／技術・経営研究会

自分達のＯＢの中にこんな素適な人がいるのかと、何かうれしささえ感じてくる。自分も、ぜひこのイベントをまのあたりにして見たかった。こういうものを見ると体がぞくぞくして仕方ない。こういう観点から建築物を見るということは、やはり建築家というよりは、「芸術家」の域にまで達していると思います。今日はすばらしいものを見せて頂いて本当に良かったと思います。

今までの授業にはないものだと思います。今までの３年間は新しいものを造ることのみで、その新しいものを生み出したために壊されていくものには目を向けていなかったような気がします。また、壊されていくものに対し目を向けただけでなく、後日、未来の街づくりの為に考えていらっしゃる所など感心いたしました。将来建築家になる自信がまたなくなりました。

山梨に異次元の空間を創り出すという、おもしろい事を見せてもらったが、あそこでやっていた劇もあの創造物も、はっきりいって我々凡人には何が何だかよく解らなかったといのが本音である。しかし、芸術というものは言葉で説明出来るものでないし、ただ単に何かを心でつかみとれば良いのかもしれない。向三軒両隣という発想は非常に気に入っているが、ああいうものを制作して、まわりの人々との意志の疎通をはかるというのは難しいかもしれない。凡人には「なんだあれは？」で終わってしまいかねないのではないだろうか。それでも何かを感じとってもらえればそれで良いのかもしれない。

地域の人々とのつながりについて考える機会は何度かあったが、風景としての建築物をどう葬るかという問題は初めてであり、今回こうして講義を聴くというものをいきなり知らされた直後の事であることもかかわっているのか、ちょっとカウンターパンチをくらったような気分である。日常と非日常との間に環境芸術をつくり、建物を葬る。これはただ受身の一方で、考えていくべきことではないかと感じた。

風景づくりパフォーマンスの話を聴いて、特に風景などは誰のものと言うより物などとは考えられないが倉庫跡などの再生などは墨田川近くのウォーターフロントに通じる所だが、その本質として、町の活性と街の風景の復活のように地域の人とのかかわりがある様だ。建築の運動というより、地域の自治運動に近いものがが感じられ、はたしてその建築家のするべき役目かどうかという事に対しては、まだよく意見として言えないが、あのような事は良いことだと思う。

我々のＯＢの話を聴いて思ったのが、「これがほんとのパフォーマンスなんだなぁ」ということです。自分のやりたいことがはっきりしていて見る人に訴えたいことがよく分かった。また「いい仕事をしているなぁ」と感動されしました。あのような地域の人々と一緒に、スマートに、力まずにやれたということがいい作品を生んだ理由だと思った。これを機会にして、少しでもこのパフォーマンス

に近ずけるように頑張りたい。

地域の人とのつながり、そして解体される前の建物を白く塗って新しい空間をつくった。これらはとてもすばらしい事だと思いました。

街づくりと一言で言われても、一体何が街づくりなのだろうか？と考えてしまう。今回のパフォーマンスでは、空虚な建物の解体の前の様子であったが、ペンキを塗った事を知らないでいきなり真白になったあの建物をみた人は、かなりインパクトがあったに違いない。高橋辰雄氏がレポーターの人にこれは一体何ですかと聞かれて、明確にこれ！という答えが出なかったが、芸術とはそういう割り切れないものだと思った。

街づくりという観点から、町内などで協定を結ぶというのはよくありそうな方法であろうが、りかんせんネガティブな考え方なのか、地域社会をコミュニティー作りというものを考えたとき疑問が残る。そういった意味で、インスタレーションのようなものをみんなで作るというこの一連の流れは非常にポジティブであると思える。建築を死化粧するというのはたいへんおもしろかった。

なにげなく街に建っている建物にも、生み出されまた消え去る一つのドラマがあるなんて今まで考えてもみなかった。その点に着目し、研究しプロデュースした久保田さんには、なかなか驚かされる。この様な日頃からの細部にわたる注意力は、自分にまったくないものであると日頃から感じていることであるので、あらためて深くこのことについて、感じさせられた。

その都市に住む個人個人が自分の住んでいる都市の事を考えて協力しあって一つのものを造るということは、とても大切なことだと思う。最近は自分の家のことだけを考えているような傾向があるので自分の住んでいる都市に誇りと責任をもってその都市の一員となることが必要となっていると思うので、今日見たビデオはそういう点から考えて非常によく参考になったと思う。

「なかなかユニークなことをやっているなぁ。」というのが第一の感想である。ただ、久保田さんもいっていたことだが、このようなことは、建物の密度の高い都市部においては、このようなことは出来ないと思った。しかし、この基本コンセプトをいかして、なんらかの変化を考えていけば、ドーナツ現象が進んで、住民が少なくなってきている都市部においても、できるのではないのかなぁとも少しばかり考えた。

街の人々による街の為の街づくりみたいな感じがして、心温たまるような気がした。もういらなくなった建物を、街の人々の手で、ペンキを塗ったり、幕を張ったりして、アイデア的にもすばらしいものであった。街の人みんなでつくりあ

げた街なので、とても愛着のある街が造れたのではないかと思う。その証拠にビデオに出ていた人々の顔が生き生きしていた。

私達の先輩でこのように活躍している姿を見て感動し、また誇りに思います。そして、久保田さんのように、思った事を実行し、故郷に還元できる姿をうらやましく思いました。

・これから一番大切な事は”東京周辺地域の文化づくり”これに貢献するこういうパフォーマンスはとても良いことだと思う。こういう事をすることによって文化の東京集中を抑えられるのではないのか。
・パフォーマンスというのは制作過程からパフォーマンスであるということ。またそれが宣伝効果としてもとても有効であること。
・これは個人的意見で、地域都市であまり前衛的すぎるものは似合わない様な気がする、演劇を見てそう思った。けれどもそれを利用して東京から人を呼べばそれはそれで良いと思う。

地域の人と建物を白く塗るなんてのは、おもしろいアイデアだと思う。建築とは風景をつくる事だと言うのはなるほどと思う。しかし、建物の葬式には反対だ。

久保田さんの街の中に、街の人々たちと一緒に、ひとつの空間を造るという計画で、僕は「街ならではの計画で、東京などでは出来ないことであるなぁ。」と思いました。おもしろそうでよい計画だと思います。よってパフォーマンスとは、勇気をもって自分のやりたいことを伝えることだと思いました。

街づくりということで地域の住民の熱意を感じた。落ちぶれた町並みを白いペンキを塗ったり、ロープを張ったりしただけで、あれほども変わるものなので感心をした。また住民とのふれ合いができて、楽しく街造りに取り組んでいて、見ていて感じがよかった。自分も、自分の生まれ育った所をこういうふうに造れたらいいなぁと思った。それから、職能人や大学教官、自治体などの協力というものがかなり大切で、こういうパフォーマンスをやるときは、色々な分野の人脈が必要だと思った。

空間に存在する一つの建物がペインティング・ライティングされ生まれ変わり、風景を変えてしまったことにとても驚きを感じました。また、このパフォーマンスによって地域の人々の意識を「病める場所」に集まったところがとてもよかった。

風景ということだけあって、建物一戸だけを見るのではなく、地域社会とのつながりとして、周囲に住む人々、自然、建物など、様々な連体や、かかわりにまで気を配っているということを感じた。そして、結構笑い合っているようなビデ

オを見せて頂き楽しめる事もできた。

今の時代マスコミに人々が振り回されていて、それが本物なのか偽物なのか分からずただ流されてしまう事が多い。これは自分たちの発想で自分たちが手足を動かし、汗水流して「何かをする」事によって逆にそれにマスコミがついてきて、何かをすることによってコミュニケーションがはかれてとても良いと思った。それと、八木沢先生のどう造るかでなく、どう「ほおむるか？」はとても印象に残った。

今まで自分は設計の時に、それぞれの特色と事情が重なり合って古くから形成されてきた地域の風景というものを考えることなく、自分の発想やデザインだけで設計してきたと思う。しかし、久保田さんの話を聞いてそこに住んでいる住民の意識を大切にしなければならないと思いました。

一番印象に残ったのは建築は現実と非現実に携わっている。あまりよくわからないが建築というものは、人間が造り出すものでそれぞれの地域・場所にあったものを造る。それがそこにあるかないかで人間の心が左右される。

街角の空洞化－人々の感心のあつまらない－すなわち人々のコミニュケーションすら無い部分を、地域の人に呼かけ芸術性の高いモノにしてしまえるという事実（あるいは、そのために行われた様々な努力に）ただ感嘆するばかりです。やはり人間があってはじめて「街」・「アーキテクチュア」と呼ぶことが出来るんだなぁと思いました。

すばらしさを感じた。建物と風景、建物と街づくりには密接な関係がある。その地域の人々の心の動き、変動というものは、建物のデザインでかなり違ってくる。これからの街づくりというものを考える時、久保田さんの建物のような物は重要な物になってくる。私たちは今後このような街造りを目指していかなければならないと思う。

地域の活性化として自ら提案したものがどんどん広がっていったのにはやはりＮＨＫの取材があったからだろう。あらためてマスコミにおけるパワーのすごさを実感しました。ともあれ街の人々のつながりというかコミュニティーにあたたかみを感じた。この計画によって街の人が一体化した役割は重要である。

昔からあって良かったけれども忘れ去られたものがまた戻ってきたという懐かしい感じを受けた。本当にあたり前の事なんだろうけど、あたり前の事をするのは大変だと思う。きっと自分の仕事に張合いがあるんだろうと思う。自分もこんな仕事が出来ればいいなと思うし、誰かやらなければいけない事だと思った。

ただ単に設計をするだめでなく、地域の人々との共同作業をすることにより、人の考えや感じ方がわかるかも知れない。ただ設計するよりもこのような人のつながりで一つの物を造る方が楽しい事なのだと思う。

設計と言えば「造ること」だと誰もが思い、その造られた物がなくなるということにはあまり感心がなく、興味を持つ人もいないものだが壊される前のこの儀式的な行事には、とても関心を持った。この建物を利用して風景というものを考え、またペンキ等を塗ることで、人々のコミュニケーションにもなり、白く死化粧をすることで人々にその風景を意識の中に残すことは大切なことであると思う。作ることにしか関わらない現代において逆の発想もまたとても重要なことであると思う。

地域計画と地域の活性化という点で久保田さんのやったパフォーマンス的な事というのは、評価されるべきであって、他県の建築士会でもあれと同じ様なイベントを行えば、建築士の地域社会的評価ももっと上がると思うし、コミュニティーという点からも、とてもすばらしい事だと思う。

建築とは日常と非日常の間にある。久保田さんの話とこの甲府のイベントはまさに建築のもつ地域の特性という点において的を得ていると思う。地域の活性化とは個々の建物がバラバラに建っているよりバラバラであっても何か共通する所があるという事が大切だと思います。その点、このイベントはいろいろな人が参加したという所に大きな意義を感じました。

久保田さんの発表はかなりインパクトのあるものだった。地域の人々が一つのことを通じて一緒になってゆく姿はまさに感動的だった。建築物が地域に貢献するさまをまざまざと見せつけられたような気がする。

とてもおもしろいところ気が付いていると思いました。壊されてしまう前に建物にもう一度、光を当ててあげるということはだれも気が付かなかったであろう。物を造るにあたって人の力しか使わずに、これがほんとうの心のこもった作品であろう。こういうイベントを行うと、見知らぬ人との交流ができてよいことである。しかし、山梨県だからこそ成功を納めたこのイベントも大都会では成功するか今後やってみてもらいたいと思いました。

今日、建物を解体するにあたって解体する前に白いペンキを塗って風景を楽しもうという街づくりはとてもすばらしい事であると思う。建築物の壁にペンキを塗るという事も芸術として見ればすばらしい建築物となるであろう。

解体する前にただ白く塗ってマストをかぶせただけで街の風景は全然違うであろう。元は木造の古い倉庫だったが白く塗ると何か原宿、渋谷にある若い人がよ

く行く店、人気のある店といった感じがする。夜、明りをつけた時の外観は本当に倉庫だったのかと不思議に思うほど、すばらしい出来上りであると思う。それに地域の人々のコミニケーションにもなるであろう。

地域の古い建物を地元の人たちでペンキを塗って再開発しようという試みは、とてもすばらしいものだと思いました。久保田さんは中学時代の学友とこのような事業が出来てとても幸せな人だと思います。自分も将来の夢を一緒におえるような仲間がほしいと思います。

街作りを風景として位置付けることは、少し考え付かなかった。地域の人間が協力し合って良いことだと思った。建築は風景造り、風景造りは街造り、街造りは地域造り、まさにその通りだと思った。建築一つを通して地域住民とのコミニケーションが図れたということは非常に意義があることのように思えた。

久保田さんのパフォーマンスは、これからの建築の企画というか、すばらしいものがあるのではと感じている。たとえば建築に死化粧をするなどなかなかおもしろいと思う。まだ逆の立場というか街を作り上げてゆくことなどおもしろいと思う。

甲府という場所が気に入りました。僕の母が長野県であり、近くだからである。このテレビは、僕も見ていて、感銘を受けた次第であります。建物を造るということは、出来上がったときにわかるものであり、その感銘は２度と忘れなく、僕も土方で道路を造った時、感激したのを覚えています。地域の人たちと密着して施工していくのが理想だと思います。

僕は基本的に街が一つになって何か行事をするということが好きです。それは僕の田舎の方でもこういう地区の行事をやった後はみんなが協力して一つの事をやったということで地区が一つにまとまって都会にはない地域（田舎）の楽しみや喜びを得られるからです。これからもこういう地域行事が一つ一つの地域で行われるようになっていけばいいと思います。

街造りパフォーマンスは、住民が参加できてとても良いことではないかと思った。このことによって、街も活性化されるのであるから。この芸術を壊してしまうのはもったいないような気もするけれど、壊してしまうからこそ自由にいろいろなことが出来るのではないかと思った。

このパフォーマンスを聞いてみて、家を取り壊すのにも、ただ壊すのではなく、こういう風にいろんな意味で街づくりにも利用したことはすごくいい企画であると思った。ペンキ塗りから始まり、祭りというイベントに発展していく。この過程が街の活性化につながり、住民の交流も深めていく。そういう意味でこのパフ

ォーマンスは大成功だったのだろうと思った。

”とり壊す前に白いペンキを塗る”ただそれだけのことが街造りの要となり、地域の人々に広まっていった。壊される物へのそれまでの愛着と、これから起こることへの期待感とが、このイベントの根底にあったと思う。

風景づくりということで、取り壊しをする前の建物に街の人々が集まって。白いペンキを塗り、夜間、照明を照らしたりして、とてもおもしろいと思いました。

建築物を葬るというのは、感覚的につかむのが少し難しいと思いましたが、建築物を擬人化して、それを葬るというような暗い感じではなかったのでほっとして、おもしろそうだとおもいました。見た感じでは「お祭り」みたいだと思いました。

非常に感激した。建築の最も大事なこと、生きていくことの本当のおもしろさを、今まで忘れていたような気がする。完成品が重要なのではなくて、そこに至るまでの過程が大切であると思う。まさしく、この建物は壊されるべくしてよみがえったのだから、完成するという目的よりもみんなで造るという事のほうに、重点を置いているのには他ならない。一人の人間の想像力によって生まれてくるものもあれば、みんなで力を合わせて完成するまでどんなになるか分からない建築もあってもいいではないか。またそれがとてもかけがえの無いもののような気がする。また、建築家は代理人であると思う。レストランのコックが料理をつくるように、本来は自分が食べるものは自分でつくればいいのに、コックに依頼したりするのと同じように、家族で住むものは家族で造れ。みんなで使うものはみんなで造れと極端に考えてしまう。本来はこの姿なのかもしれない。しかし、代理人ということを認めない訳ではないので（現在の社会組織上）この事をよく覚えておいて、建築に携わりたい。